

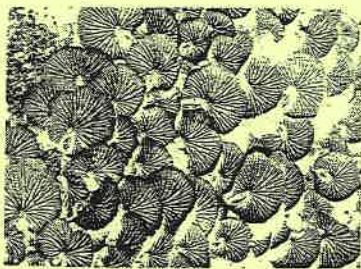
やまぐち自然派宣言

No. 2



自然共生の思想
最古の哲学では、
人と自然は対等に
位置づけられていた。

共生



特集 巨木の世界
神のやどるご神木
人の心をなごます木
芸術家も木の世界を
追求しつづけてきた。

山口の生態系 (二) 草原の世界

人間がつくりだした草原
この風景は絶滅の危機
にあった。草原は興味深い世界

やまぐち自然共生ネットワーク

2005年10月29日

山口の山々から思うこと

山口には高山と言える山はなく、日本の山三百にも入らない。寂地山など千メートルを超える山々が島根、広島の県境に連なる以外は次第に高度を落とし響灘へと落ちていく。それだけに人との関わりは濃い、いわゆる里山である。

かつては、豊かであった植生は天然林から人工林へと変わり、経済環境の変遷による林業の衰退とともに、山への目が向かなくなり、山村集落共同体の荒廃に拍車をかけている。

里山の荒廃を考える

一、林業の衰退

今、山口の山々を歩くとき、山仕事の人に出会うことはまずない。東京の奥多摩の山々では、出会わない方が少なく挨拶を交わすのが常であった。耕地も乏しく険しい奥多摩では林業以外に生きる糧のない人も多く、必然的に山に入る生活しかないが、山口は兼業が多く、農業や

他の所得も得られやすい。従って山の手入れは次第に手薄になり荒廃は進んでいく。枝打ちされていない杉や桧の林、倒木などで道の呈をなさなくなった林業道も多い。もともと山口では林業という生計は少なく、山に生きるという感覚は乏しかったものと思われる。そのことが竹の浸食を増し、他の植生を駆逐する一因となっている。

二、山の恵み

奥深い信州や東北などと異なり、谷も浅い山口では、避遠の地はない。山には山菜などの恵みは多彩であるが、山菜への執着、依存は少なく、山菜を楽しみ、食す程度の位置づけであったと言える。

ワラビ、ゼンマイ、ウド、タラの芽、フキ、キノコなどの山の恵みが活用されているとはいえない、お陰で収穫は多い。

三、山と信仰

自然豊かな山口の山々では、岩、木々など、人々の自然崇拜、素朴な信仰心の



金比羅山（旧田万川町）

対象物に事欠かない。訪れた多くの、いや、ほとんどの山々に信仰心の名残が見られる。日本の山全体がそうであるよう

にモンスーン気候の豊かな植生の地には戦うべき自然はなく、豊かな恵みの自然としてそれ自体が信仰の対象となった。

農耕民族は春夏秋冬に自然に委ねる生活があり、そこには様々な祈りと崇める対象があつた。それが生活の変化、里地の変化、村落共同体の崩落とともに大きく変化してしまつた。このことが、今日の里山の崩壊をもたらした大きな要因であると山口の山々を歩き実感している。

多くの山々の山頂や中腹にお堂や祠があり、石仏が祀られている。かつては集落の人々が大切に護り、道の手入れもされてきたが、今では集落そのものが成り立たず、人的にも精神的にも見向きとが薄れ、朽ち果て、荒廃し、道も埋もれつつある。人の気配が山から遠のいてしまつた。このことが人と動物とを棲み分ける境界がなくなつた一因でもある。

確かに、動物に必要な自然林が減少し人工林に変わったことは動物の棲息可能

な面積を減少させたが、里山の荒廃と人間の関わりとの面では信仰の対象としての山の存在の希薄化は無視出来ない。

四、里山の再生

今、里山の再生のために様々な試みがなされている。森林税の創設による財政的な対応も進められている。水源としての流域と一体となった取組みなど効果的な対策も講じられようとしている。放任された竹林の除去と新たな植林なども行われている。

問題は山と山林の多くは民地であるが、所有者には良好な管理保全の能力がないということである。たとえ意志はあつても高額な経費を費やし、それを行うことが困難な状況にある。林業が成り立たないのはサイクルが長すぎることに、見通しが立たないことから投資が出来ないことにもよる。これまで多額の経費をかけ、今その採算が大きく割り込み、切り出す経費も出ない状況下で山の保全を

求めることは出来ない。そのためにはどうすればいいのか、公共的な価値を創造し、共通認識として再生するには納得できる抜本的な手伝いが必要である。

また、さきに述べたように信仰の対象としての山が消えていくこと、それにどう対処するかも里山の復活に大きな意味がある。老人ばかりの村落に求めることは難しいが、今豊かな知識のある老人と協働して取組むことが可能である。そこにボランティアの活動余地が大きい、また教育としての取組みも可能である。山との関わりも意味をもつて進めることが出来るし、ボランティア的な行動の根源である最も大切な充実感も生まれるであろう。

山口県環境生活部長

久保正人

共生の思想を考える

人類最古の哲学が語る共生

自然共生ネットワークが結成されて二年、私たちは「自然共生」思想をとことん探究する必要がある。なぜなら、私たちが組織した自然共生ネットワークの目標はこの思想を社会に拡げることを目標にしていたからだ。そこで、山口県で開かれる様々なシンポジウムでも、この問題を取り上げ、様々な角度から自然共生の中身を追求し、この会誌でも、基本テーマとして、この問題を問い続けなければならない。

「共生」という言葉は、生態学で使われる用語である。その中身は、種間関係のあり方であった。生態系を形成する種は、様々な種と複雑な関係をつくっている。例えば、ライオンはシマウマを捕食する。この関係は捕食・被食関係である。また、樹木と菌根菌の関係は栄養共生である。菌根菌は根のまわりに生活し、樹木が水分や肥料を吸収するのを助ける。これに対し、樹木は光合成した栄養分を菌根に与える。この両者は互いに共生関係にあるという。この共生

の用語は生態学の枠を越えて、一般にひろく使われるようになり、それにつれて内容も拡大されてきた。

その背景は生態系の複雑なネットワークの中で、敵味方が判然としないことが多い。敵と思われるものも、まわり回ってゆくと、いつの間にか味方になっている。豊かな生態系では、どのような生き物も、敵対関係にあるというより、共生の輪に加わるメンバーとして認識されている。共生の思想の根源は、他の生き物やそのつながりを尊重することが特徴である。

私たちの日常の暮らしを振り返ってみよう。私たちは木や草、虫といったものをどのように見ているのだろうか。ひよつとして、私たちは人の生活のアクセサリーか、せいぜい共存者ぐらいにしか見ていないのではないだろうか。実際は私たち人類は木や草、虫といった自然に支えられ、共生してきたのだ。そんなばかな・・・と考える人はじっくり考えてほしいと思う。

人と自然の関わりの歴史を考えるのは大切なことだ。人類が最初にもった哲学は、人と自然は対等に位置づけられていた。人類がつくりだした神話や伝説にこの哲学が

語られている。神話では、動物たちは自由に人とふれ合い、毛皮を脱いで人間のように振る舞い、人間の言葉で話すことができた。人も、毛皮を着れば動物になり、その動物と結婚し、森の中に消えていった。この対等の関係が重要だった。

また、人にも動物にも魂があり、この魂が自由に移り変わった。例えば、人は熊を獵の対象にした。人は熊を見つけると、命懸けで撃ち殺した。熊は人から逃れようと死にもぐるいで立ち向かってきた。ところが神話では、熊は人に簡単に撃ち取られていた。熊はひとに毛皮や肉、肝などあらゆるものを提供したのだ。その代わり人は熊のすべてを大事に処理し、魂を心を込めて熊の国に送り届けた。勿論この際にはたくさんのおみやげを持たせるのである。そこで、熊は仲間達に、自分がいかに人の国で大事にされたかを伝えるのだ。そして熊は再び人の国やってくる。こうなると、熊は人に毛皮や肉などを贈与する。これに対して人は熊の最も大切な魂を丁寧に熊の国に送り届ける。人はここで厳粛な儀式を行ったのである。この関係が人と動物の間にできあがり、共生関係が成立し、無駄な殺傷は禁止されたのである。

やがて、人々は熊やオオカミ、シカ、ヘ

ビ・・・などの動物を神として尊重するようになる。自然のあらゆるものを神として尊重する考え方はアニミズムとして知られている。その動物の持つ能力が優れており、人々はそこに神の存在を感じたのだろう。日本の古来からの宗教である神道もその底流には自然を神として崇める思想が貫かれていた。

秋吉台には「ヘビの森」や「ヒキの森」という杜さまがあり、ヘビやカエルを神として祀っている。

カエルは水辺に住み、私たちに水をもたらす神だ。とは言ってもカエルは農民達にとって、苗代の害を与える厄介者だ。だから、人々はカエルを適当に駆除しながら、共存を果たしてきた。

ヘビは、マムシなど危険な存在だ。しかし、ヘビを神として大事に敬った。ヘビの力は偉大で、人も倒してしまう。また、ヘビは水をもたらす。地上から天に昇った龍は雷雨をもたらす。洞窟にうごめく龍も、多量の水をもたらす。だから人はヘビを神として敬った。

巨木には、ツル植物が巻き付き、長い年月をえたものは、ヘビがとりついたように見える。巨樹と巨大なツル植物は神秘的な幻想を導き、「ヘビの森」が誕生したのだら

う。人々はここに集まり、巨木の前にひれ伏し、暮らしの平穏を神に祈る。日常の平穏な暮らしはこのヘビの森が護ってくれるのだろう。

奈良時代には仏教が入ってくる。この仏教の教えは日本人の心をとらえた。しかし、この裏には、日本人の心を流れてきた自然に従順に生きるという考え方が独自に導入されていた。空海は太陽を中心に置いた教えを導いた。仏教では次々に偉大な教えを開く人々が誕生し、その教えを次々に展開していた。しかし、自然を重視する考え方は正しく伝えられてきた。

ラファディオ・ハーンは日本人の自然崇拜に注目し、様々な随筆を書いてきた。日本人が神道や仏教の教えを受けて、生活している実態に興味を持ったらしい。ここには生物との共生を行ってきた人々の考え方が織り込まれている。

ある時、列車事故でたくさんの人が亡くなった。ところがここからたくさん蝶が飛び立った。死者の霊が蝶に姿を変えたのである。ここでは、人の魂は生まれ変わり、虫や草、けものになるという「転生」の考え方が支配している。すべての自然と共生

する背後には我々人間も、次の世では虫や草に転生するとう考え方があったといえる。だから、仏の教えでは、虫や草にも、人に対するのと同じような思いやりが必要とされた。金子みすずの「大漁」にも、魚に対する優しい思いやりがにじんでいる。

近代科学では、霊や魂は消え去った。いわゆる神なき時代に入った。これまで、長い間、人と自然の共生を支配してきた霊や魂が消え去ったのである。現代では、これに代わって新しい思想が生まれてくる。

現代科学による共生の思想は、自然を総合的にとらえる生態学から導き出された。自然は四十六億年という膨大な時間をかけてつくり出された。地球上に生まれた生命は進化を繰り返して、膨大な生物をつくり出した。そこには、複雑な生命のネットワークが生まれ、これが自然を成り立たせている。勿論、人もこのネットワークの一員で、無数の生命の輪によって生存が支配されているのだ。ここから、「共生の思想」が生まれ、特に環境運動として社会に定着してきたのである。

希少野生動植物保護シンポ

ジウムの概要

七月二十四日(日)山口県の主催で、「希少野生動植物保護シンポジウム」が山口県セミナーパークで開催されました。「豊かな自然を将来に引き継ぐために」をテーマに掲げ、基調講演やパネルディスカッションなどが行われました。



基調講演「自然との共生を考える」

講師 北九州市立いのちのたび博物館

小野 勇一 館長

野生動植物が希少になった原因は二つある。一つは元々個体数が少ない。もう一つは、外来天敵の影響や人為的な生息地破壊などである。

「新生物多様性国家戦略」では、四つの理念と七つの提案がされている。

四つの理念は、

- ①人間が生存する基盤を整えること。
- ②人間生活の安全性を長期的、効率的に保証すること。
- ③人間にとって有用な価値を持つ自然物を尊重すること。
- ④豊かな文化の根元となることである。

七つの提案は、

- ①絶滅防止と生態系の保全、
 - ②里地里山の保全、
 - ③自然の再生、
 - ④移入種対策、
 - ⑤モニタリングサイト一〇〇〇、
 - ⑥市民参加・環境学習、
 - ⑦国際協力である。
- 野生とは人との関わりなしに世代を維持

し、存続している個体群のことである。また、共生とは異質なものが互いの生き様を尊重しあうことで、共に世代を超えて存続することである。

自然界ではどんな生き物も個体群という形で存在している。生き様を尊重すると言うことは、各種類の個体群の存続を見守ることであり、場合によってはその存続の手伝いをするのである。生物多様性の保全とはこのような考え方でなされるべき人間活動のことである。

個体群の特性には二つの大きな流れがある。一つは多産・早熟系であり、もう一つは少産・晩熟系である。

生物界では昆虫や植物の割合が大きい。動物界では昆虫類が数で制覇している。

生物多様性の価値には直接的価値と間接的価値の二つがある。

直接的価値として、

- ①太陽エネルギー獲得者としての緑色植物、

- ②有用な遺伝形質を持った生物の二つがある。

間接的価値として、

- ①植物による水サイクルの維持、
- ②植生による気候の調整、
- ③樹木等による土壌の造成、

- ④微生物等による汚染物質の分解、
⑤人が自然との交流を通じて得られる利益がある。

結論として、人と野生動物が共生するためには、すみわけが必要である。それぞれの生息地をすみわけすることで、共に世代を超えて存続できる。



パネルディスカッション

「希少野生動植物のこれからの保護について」

■パネリスト

北九州市立いのちのたび博物館

小野 勇一 館長

NPO法人やまぐち里山ネットワーク

中山 淑子 副理事長

山口カブトガニ研究懇話会

原田 直宏 代表

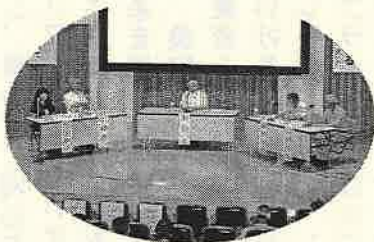
県野生生物保全対策検討委員会

山岡 郁雄 委員

■コーディネーター

県自然環境保全審議会

庫本 正 委員



山岡 野生生物をまもったいくつかの事例を紹介する。ある道路建設現場で絶滅危惧種のカスミサンショウウオの繁殖場が見つかった。事業者と意見交換を行い、繁殖場の環境を維持するために水源を閉ざさないようにし、道路からの汚水を迂回させるという計画変更を行った。もう一つの事例は、道路建設現場でヒキガエルの産卵する堤への水路が土手で遮断される計画があった。意見交換後、水路を確保し、新たに流れの緩やかな水路をもう一つ設置し、幼生が上陸する通路とした。人の知恵と技術は、野生生物と共存できる方法をいくらでも工夫することが出来る良い例である。

原田 カブトガニは、かつては瀬戸内海の東は大阪まで多数生息していたが、現在では、瀬戸内海のごく一部と九州北部のみ

で生息している。人の活動の結果、絶滅危惧種とされるまでに減少している。山口県内では、三区域で繁殖が確認できるが、大変少なくなっており、回復の兆しは認められない。保護が必要である。

小野 北九州にもカスミサンショウウオがいるが、その生息地で工事が行われる場合には、事業者は、源流を全て残せといっている。また、カブトガニの産卵地も確認されているが、間違った保全をしてはいけない。その種の性質を知って保全をすることが大切である。



中山 やまぐち里山人ネットワークは森林・里山の再生と文化の創造を目指す活動をしている。奥山・里山は、生物多様性保護の場である。高齢化、担い手不足によって、森林・竹林が荒廃し、生態系のバランスが崩れた。森・川・海のいのちのつながりを自覚しながら、森林・竹林ボランティア

アを実践し、農山村に関心を寄せ続けることをライフワークにしていきたい。

山岡 ブラックバスが在来種の稚魚を食べて生態系を壊している。ブラックバスの住む池は、農家にとってはいのちの水瓶である。漁業者と農業者で折り合いを付けて駆除していけると良い。釣り人は釣ったら食べて欲しい。

小野 ブラックバスは六〇年代から増えてきた。漁業者は川に食用魚を放さなければならぬため、昔ブラックバスを放流したのではない。富士五湖はブラックバスの里のようなものである。みんなで知恵を出して、ブラックバスを川に入れないようにするにはいけない。



原田 県内でカブトガニの研究者は残念ながら自分一人である。山口湾にカブトガニがどれだけいるか一人ではわからない。

カブトガニに最適な生息環境とは泥質と砂質がどれくらいの割合なのかデータがとれない。行政の協力が欲しい。

小野 大学の先生や博物館の研究員などの研究者はその地方で育てないと恥ずかしい。文部科学省は、生物多様性国家戦略といいながら、その研究者を育てようとしていない。

中山 森が荒廃している。農山村の人だけに森をまもらせるのではなく、都市の人にももる活動をして欲しい。家庭でそのことを話すことも大切である。森・川・海それぞれのエリアでまもることが大切である。森林税が導入されて仕組みが出来る。良いことである。



庫本 あらゆる生物をまもることが大事である。

山岡 田植え体験で子供がカエルなどの

野生生物を見つける。このように野生生物の生きているところへ子供を連れて行く事業を実施したいと考えている。

原田 観察会の目的は、カブトガニを身近に感じてもらうことである。行政の担当者は二、三年で替わって継続性がない。堤防のかさ上げ工事をする市の新しい担当者がカブトガニのことを全然知らなかった。普及啓発は大切である。

小野 昔はヘビなんかは怖いものと認識していて、近寄らなかった。ちゃんとすみ分けが出来ていた。

中山 地球誕生から現在を一年に置き換えたらどうなるか。一月一日地球誕生。六月十一日アメーバ誕生。十一月二〇日生物陸上にあがる。十二月三十一日夕方人類誕生。十二月三十一日二十三時五十八分人類農耕作業開始。同日二十三時五十九分五十八・五秒環境問題発生。この一・五秒の間に人類は地球を環境汚染で破壊しようとしている。しかし、人類にはイマジネーションがある。環境汚染を解決して行かねばならない。

庫本 秋吉台には、ヘビの森とカエルの森がある。昔の人はヘビやカエルを神としてあがめていた。野生動植物の保護を進め、健全な生態系を取り戻し、子孫が健康で心

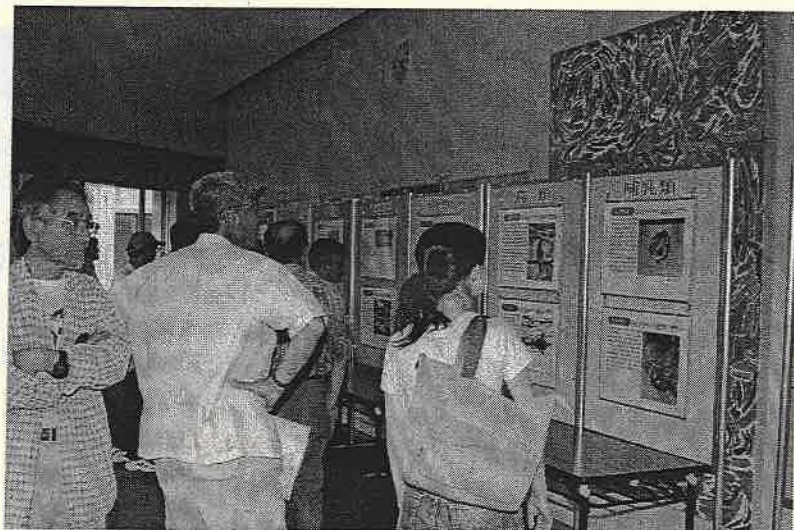
豊かに暮らせる社会を目指しましょう。

小野 山口県は森の県だと胸を張って欲しい。森をみんなでもって大事にして欲しい。博物館などの専門家を育てて欲しい。庫本 この条例制定を契機に、保護支援員制度などで、みんなで野生生物を保護していきましょう。

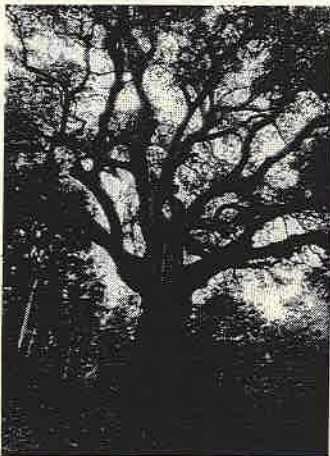
パネル展示

会場には、「山口県希少野生動植物種保護条例制定の背景と経過」、「山口県の絶滅のおそれのある野生動植物種の写真」などのパネルが展示され、参加者の理解が深まりました。

参加者は百五〇人。シンポジウムの開催を通じて、自然との共生の大切さ、県民みんなで希少野生動植物をまもっていく気運が高まりました。



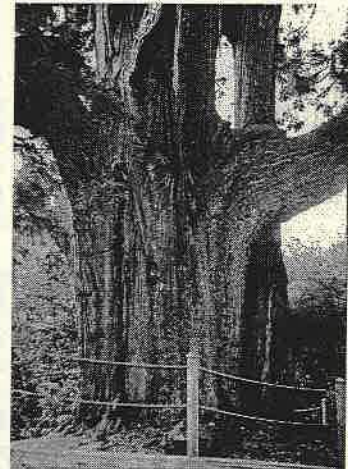
(山口県自然保護課)



共和のカシの木

巨木

特集



平川の大杉



巨木とは何か

木は魅力的だ。いつまでも同じところで動くこともなく、いかなる運動もせず、いかなるたぐいの自己肯定もせず、非常に長い生命を生きる。人間は自己中心的で、絶えず自己主張を続けるのに比べると、木は誰にも迷惑をかけず、他の者から何ものも奪わず、ただ空に向かって枝を伸ばし、立っていることに満足している。木には学ぶべき点が多い。

木は何千年もの長きにわたり生き続け



川棚のクスの森

る。人はその天寿をまっとうした巨木を前にすると、生命のすごさ、怖ろしさを感じる。これはスピリットのせいだろう。人はただひれ伏すのみだ。

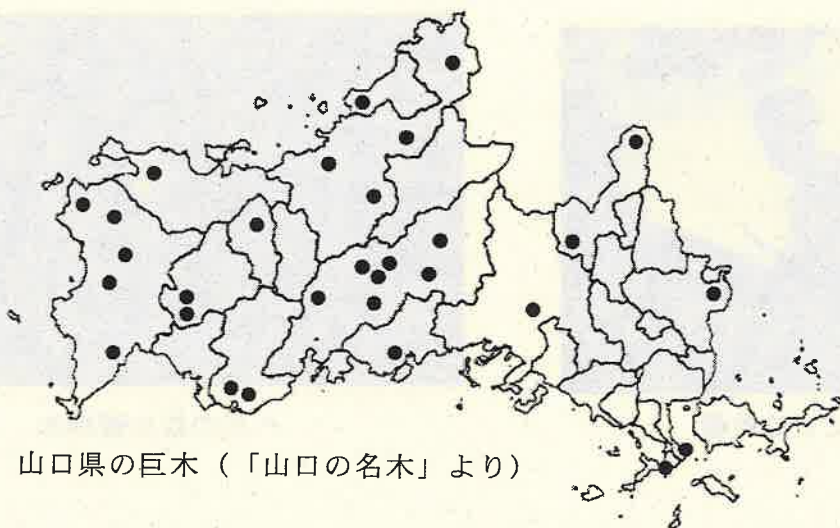
人は巨木と向き合っていると、いつの間にかその境界が消え去り、自己同一化が起こる。すると、人はその木の伝説や物語を生み出す。人々はその物語に感動して、木にさらなる思いを託す。

山口県にも巨木が多い。それぞれの巨木には面白い伝説があり、心をときめかす。

最も有名な巨木は、川棚のクスノキだろう。人々はこの木の根元に集まって、この木をたたえる詩を唄い、木と遊ぶ。この木とつきあっていると何となく安心できるからだ。

巨木の中には、神が宿るといわれている木がある。この木には注連縄がまかれ、御神木を示している。近づいてみると、みるからに神々しい。仰ぎ見ると自然に身が引き締まる。永遠の生命力のシンボルだ。

今では、巨木はかけがいのない文化財として保護されている。巨木は国や市町村によつて天然記念物に指定され、保護されている。

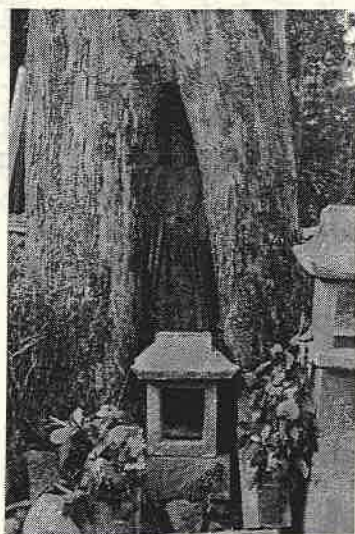


山口県の巨木（「山口の名木」より）

木の民俗

南方熊楠は生まれると、近くの巨樹、楠を祀った宮に行き、宮司から名前をもらった。その名前は藤や楠、熊といった字だった。この名前を受けた者は病気になる、楠神に平癒を祈る。熊楠は四歳の時、大きな病気にかかり、医師もなげ出しそうになった。早速父につれられて、早朝に楠神に参った。その時の神秘的な雰囲気を生涯忘れなかったと云う。幸い病は完治した。以来この体験を基点にして、成長してからも、楠の巨木を仰ぐたびに楠と交感し、魂の浄化をくり返した。

これは氏神信仰の姿だった。木をご神体にした氏神様があり、人々はこのある度に出かけて祈ったのである。



萩市願行寺のカヤの木



ヘビの森

木に神や仏が宿するという考えは古くからあった。御神木というのがこれにあたる。萩市福栄のお寺に木食上人が観音像を掘ったというカヤの木がある。木に宿る仏を掘り出したのだらう。今もたくさんの人々の信仰を集めている。

山口県にも巨木をご神体にした信仰がある。「杜さま」などである。お祭の日には巨木のもとに神職がやってきて、地区の人々総出で柏手を打って、木に祈りを捧げる。こうして人々は木と語り合い、交感を続けてきた。



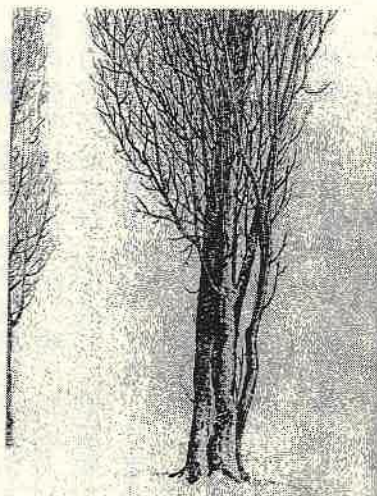
木に祈る神職



ヘビの森の御神木

木のアート・音楽

芸術家は木と対決し、心に感じたものを自由に表現してきた。山口県が生んだ彫刻家、澄川喜一さん（元東京芸大学長）は、木の持つ「たわみ」を作品にしてきた。



駒井哲郎 樹木 (1958)

版画家の駒井哲郎は、たくさん木の作品を残している。木の一本一本からたくさんんことが語られている。

画家の中には木に宿るスピリットを表現し続けている人もいる。ピノーネは森で見つけた木に人の影を感じとり作品にした。アートも一種の言語だから、言葉で表現できないものは絵や彫刻で示されよう。

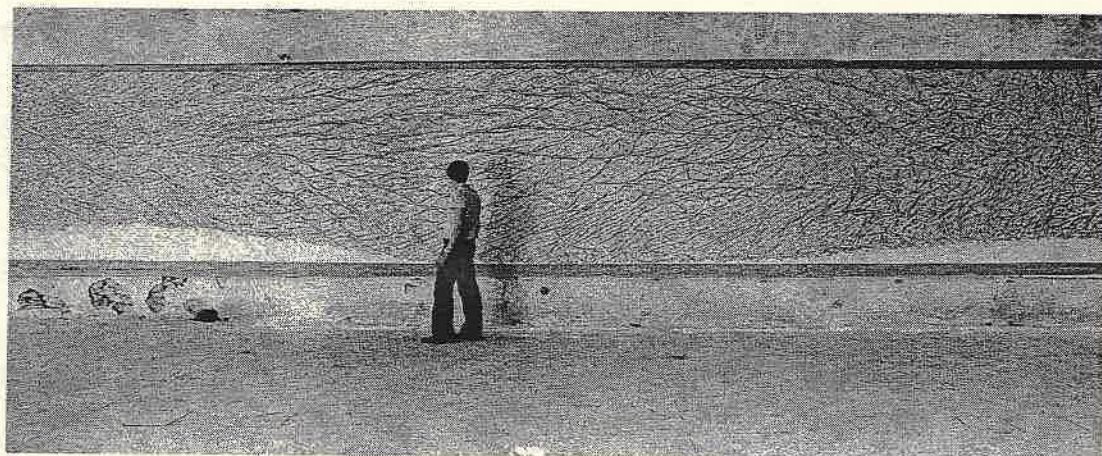


R. グラハム 木 (1991)

作曲家武満 徹は木が好きだという。木を見つめると、様々な感情が湧いてくる。言葉で表現できないものもある。これを音楽で表現するのだ。木の元で、静かに木と対峙していると、風の音やここを訪れる小鳥のさえずり、遠くでスピーカーから流れてくる音・・・など様々な音が響き合う。一見異質と思われる音のハーモニーが異様に美しく感じる。ここからヒントをえて氏は多くの傑作を生み出した。「ノーベンバーステップ」もその一つだった。

武満には「レインツリー」という作品がある。雨の中で見る木だろうか、それとも旅人に水を与える木だろうか、ギターとパーカッションの合奏曲が、木の暖かさを伝えていく。

(庫本 正)



G. ピノーネの作品 (1978)

木の文学

「薄墨の桜」に思う

山口県が生んだ小説家宇野千代には「薄墨の桜」という作品がある。この小説は木と人の共生を語る美しい世界が語られている。

薄墨の桜は、岐阜県根尾村にある桜で、幹の回りは三丈八尺（約十二メートル）、枝の広がりには約二反歩（二千平米）、樹齢千二百年と推定されている。作者は「今行けばまだ見られる」というので、この桜を見に行った。ところがこの桜は大きいには大きい、「枝が二つに裂けて、その間から柝植の木の群集している様はいつそう痛ましく、老残の木の枯死する寸前」であった。

木の傍らに、これも風雨に晒され、はつきりと字も読みとれないような立て札があった。それによると、昔、この山奥に隠棲中の継体天皇が都からの迎えの人に連れられて里を離れる時、そこにお手植えされたらしく、その時うたわれた御製の中に「薄

住みよ」という言葉があり、これがこの桜の名のもとになったと書かれていた。

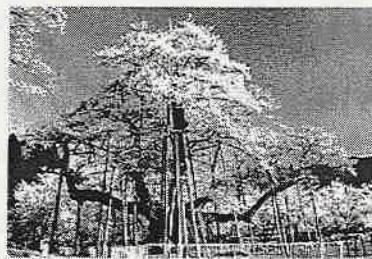
作者は天皇の心の思いをこの桜の孤独な有様にうかがえてなお一層無惨に思えた。そこで、この桜にもう一度花を咲かせることはできないものかと考えた。役場に相談に行くと、資金がなくて、再生は困難だと言った。しかし、作者は「お金がないのではなくて、この木を助けないという熱意がないのだわ」とため息をつく。「なんとか助けたい」、この思いがたくさんの人を動かし、資金調達はもちろん樹木医などが力を合わせて再生事業にとり組んだ。

枯れそうになった老木の根に、桜の若木から取った根を何百本も根継ぎをして蘇生させることに成功する。

その過程の中で、「こんな老いぼれたさくらを再生させるより、道路や橋を造った方がよっぽど村人のためになる」という地方権力者の老婆のもとにいる芳乃という女性が印象に残る。彼女は作者の作品である「薄墨の桜」という着物を着てこの世を去るのである。その芳乃の気持ちを鮮明に汲み取って描写している。

言葉を語らない芳乃の気持ちを察することのできる、繊細で想像力のある宇野千代

さんであるからこそ、物言わぬ桜の木に継体天皇の思いに想像を馳せ、再生に導いたのだと思う。これは私の勝手な解釈かも知れないが、人の気持ちを思うことと、自然の命を思うことは、その人の人となりで、優しさや洞察力、想像力、感性など、様々な今から生きて行く上での課題をいだいたように思った。



薄墨の桜



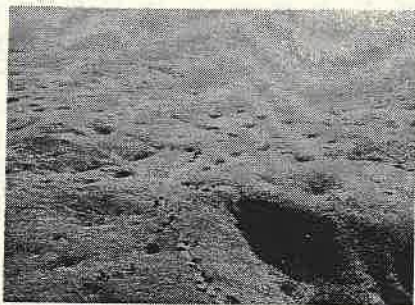
（高実りか）

山口の生態系探訪

(二) 草原の世界

草原は、草地をいう。草地には乾燥したところが乾燥草原、湿ったところは湿原という。山口県の大規模な乾燥草原は秋吉台で見られる。しかし、大規模な湿原は見あたらない。ただ、秋吉台の地下には壮大地底の湖などがあり、ラムサール条約の湿地登録が予定されている。

日本の草原の多くは、人の力で作り出したものである。農業では、たくさん草を肥料に使ったので、昔は至るところに草原があつた。草原をつくりだす方法は、春



秋吉台のドリーネ群

先に枯れ草を焼き払うことだ。秋吉台も昔から三月に山焼きをして、草原をつくり出した。夏になると、ここで生えた草を刈り取り、堆肥をつくって田や畑にいられた。江戸時代には、秋吉台は千鞍台と呼ばれ、たくさん草が刈り取られていたことが分かる。地域の人々は競い合つて草を刈った。

草原はよく観察すると、ところによつて植生が微妙に違っている。最も広いのはネザサーススキ群落である。石灰岩柱のまわりでは、アキヨシアザミやアカネスゲが見られる。これらは石灰岩性植物と呼ばれている。ドリーネの底はクズやススキといった荒地地植物が多い。ときには、セイタカアワダチソウが占領したドリーネもある。しかし、長い年月の中にはネザサが勝つて、笹原になる。また、絶えず草刈の行われている地域にはチガヤが多くなる。人の侵入の多いところにはシバ群落や力ゼグサ群落が見られる。

草原では、草が主役だ。草が多いと草を食べる虫が多い。キリギリスの仲間、バッタの仲間、コオロギの仲間などがたくさん見られる。

また四季折々に、たくさんの野草に花が咲き、美しい。この花には多くの草原性の

蝶、蛾、ハエ、蜂、アリ、カナブンの仲間がやってきて蜜や花粉を食べる。

こういった虫たちが多くなると、それを捕食する動物が出現する。カマキリやクモ、アマガエル、カナヘビ、草原性の野鳥、コウモリが活躍している。

さらにこの動物を捕食する動物が出現する。イタチ、テン、タヌキ、アナグマ、フクロウ、ワシタカ類……。こうして草原は見事な生態系ができあがっている。



秋吉台の山焼き



ヒヨドリ

草原を壊すのは誰か。火に強い樹木や帰化植物、そして人だろう。草原は毎年春先に行われる山焼きで、樹木は焼き払われる。ところが、特に火に強い木が出現した。クヌギなどの皮の厚い樹木だ。ドリーネは昔から人々によって耕作されていた。ドリーネの回りには、桐やハゼノキ、クヌギ等が植えられた。クヌギは繁殖力が強いので、年々拡大し、秋吉台中に拡がっていった。だから、草原を維持するには、人が管理しなければならなくなる。少しづつ人の力で、伐採をして、良好な草原をつくる必要がある。竹も草原に進出してくる。地下茎は山焼きの火に強い。だから竹は地下茎で拡大する。



サビキマダラヒカゲ

セイタカアワダチソウはドリーネを中心に侵入、大暴れをした。ドリーネ耕作を放棄したところからセイタカアワダチソウは繁茂しはじめた。しかし、駆除対策を地道に行えば、勢力を抑制することが可能だ。秋芳町自然保護協会は長年にわたりセイタカアワダチソウの抑制にとり組んできた。はじめは、農薬を使っていたが、これでは絶滅できないので、天敵による防除を進めている。

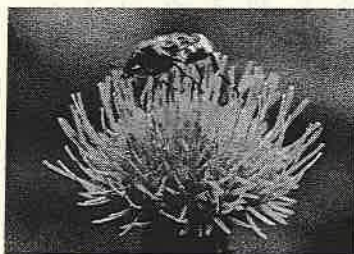
健康な草原は、ここに住む生物たちがいかに多彩（多様性）で、数が多い（豊富）かで決まってくる。生物の複雑なネットワークが豊かな場合、より健康な状態が維持できる。

人は観光などの産業をおこし、金儲けのために懸命になる。草原に道路を造り、ま

た自然観察のための歩道を造る。しかし歩道も過剰な利用が進むと草をすり減らし、さらに土壌侵食をおこし、ガリー状に破壊されてしまう。観光事業では、壊れることに関心を示さないことが多い。お陰で、重要な歩道は荒れてしまう。

秋吉台パークボランティアの会はこのような壊れた所を地道に修復してきた。

また、正しい自然観察のあり方を追求している会もある。秋吉台の自然に親しむ会などである。野草の保護や自然保護に懸命だ。草原を彩るオキナグサやムラサキといった野草はいつの間にか盗掘されて、少なくなっている。たくさんの人々の努力で、共生の重要性を認識し、こういった総合的な活動が進展すれば、秋吉台は本当に保護されるだろう。今後健康な自然を求めて、たくさんの人々が力を合わせて努力されることを願っている。



アキヨシアザミ

ネットワークの会員紹介

(四) 秋吉台エコミュージアム

秋吉台エコミュージアムは平成十二年にオープンした。

山口県の代表的な観光地である国定公園秋吉台において、子供達をはじめとする多くの利用者が自然とふれあい、自然観察など自然を学ぶことのできる施設である。ここには、エコ・ミュージアムとエコ・フィールドがある。

エコ・ミュージアムセンターは、秋吉台や洞窟の発達の歴史やそこに生きる動植物の紹介を実物や模型などで解説している。



ここには、エントランスコーナー、台麓フィールドコーナー、洞内フィールドコーナー、台上フィールドコーナー等があり、秋吉台の洞窟の分布や秋吉台周辺の総合的な情報を知ることができたり、洞窟の発達の歴史や洞窟の動植物の解説もある。さらに台上の動植物の紹介、大型地形模型、ハイビジョン映像による台上、台麓の景観の紹介もある。

エコフィールドでは、秋吉台の自然に実際にふれ合う施設として、園地や歩道が整備されている。

自然環境学習会

秋吉台エコ・ミュージアムでは、展示、解説などのほかに子供さんをはじめ、多くの方々に秋吉台の自然を知り、理解していただくために、自然環境学習会を開いている。初年度は十回の実施で、参加者は二百十人余りであったが、年を重ねるごとに実施回数も増やし、昨年度は初年度の倍以上の二十三回を数えるにいたった。参加者数も、倍以上になっている。

秋吉台エコ倶楽部

自然環境学習会が年々盛況になってきた

のは、秋吉台エコ倶楽部の皆さんのお力添えがあったからである。会員数は多くないが、皆さんが献身的にサポートして下さるからと感謝している。今も会員を募集しているの、ふるってご加入下さい。

入館者数

会館の年度は一万六千人を超したが、ここ数年は、一万三千人程度である。もっと多くの皆さんに利用していただきたいと思っている。



(前田時博)

(五) 田中 進

カエルフォーラム 環境アドバイザー

去年十月米科学誌サイエンスに、両生類の三分の一は絶滅の危機状態にあり、日本の二十種類の両生類が絶滅の危機にあると発表された。環境の変化に深刻な影響を受けているのが、両生類で、山口県でも絶滅の恐れのある野生生物の調査が行われ、

平成十三年レッドデータブックやまぐちとしてまとめられた。実に多くの野生生物の減少が報告される中で、以前ならどこでもいた筈のカエルたちも姿を消そうとして

る。全てが人間活動のせいという訳ではないが、調査は多くの種類が減少していることを示していた。山口県に生息する十七種類の両生類のうち八種類もが絶滅危惧のいずれかのカテゴリーにあてはまる。

私たち人間は、快適な生活を目指し、経済のスピード化と効率化を実現したが、気がつかない中に、足元のカエルの置かれて



カエルフォーラム

る自然は瀕死の状態になっていた。自然を省みないこんな生活スタイル、いずれ私たちの精神をも病んでしまうだろう。

少しでも、多くの人に身近な自然を肌で感じてもらいたくて、カエルの観察会や講演会を各所で行っている。

ほんのすこしでいいのです。私たちの足元でしたたかに生きる小さな動物、懸命に生きているカエルに気をくばしてもらえませんか。

きっと新しい明日が見えてくるとおもいます。

編集後記

やまぐち自然共生ネットワークが結成されて二年になる。本誌「共生」も二号をお届けでき、なんとか義務を果たせたので、ほっとしている。

この号も、創刊号同様なんとも固まるしい感じの会報になってしまった。今後皆さんと共に少しずつ崩さなければならぬと思っている。

特集には巨木を取り上げたが、巨木にもっと関心に向け、保全のために役立ちたいと思っている。巨木の世界は、たくさん生物たちがつながっており、自然共生の素晴らしい教材になっている。

山口県希少野生動植物種保護条例の制定を記念して、行われたシンポジウムの記録も掲載できた。

そこで、次号に向けて、皆様からの投稿を受けつけて、紙面を会員中心の楽しい話題満載にできればと思っている。皆様のご協力を心から願います。

編集係

庫本 正

田中 浩

高実 りか